第８分科会

学生への留学支援と国際交流に関する試み

報告者

深澤　清治　（広島大学 大学院教育学研究科 教授）

仲谷 ちはる　（東京家政大学 教育・学生支援センター 主任）

新井　康友　（京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文学科長・教授）

コーディネーター

Robert　Kritzer（京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文学科 教授）

服部　昭郎　（京都ノートルダム女子大学 国際教育センター長 人間文化学部人間文化学科 教授）

海外の大学や大学院に留学する日本の学生が減っていることから、日本人学生の「内向き志向」が指摘されている。

各大学においても、国際教育センターなどの組織を作り、大学教育カリキュラムに位置づけられた、学生への留学支援、国際交流に関する試みを実施している。本分科会では、この大学での留学プログラムに焦点を当て、高度な言語運用能力の育成、国際理解学習、異文化コミュニケーション能力の育成などを目的とした、大学における教育プログラムの理念と効果を考えたい。

まず、各報告者が『学生への留学支援と国際交流に関する試み』の理念や効果を紹介する。担当職員の方からの「留学に関しての教員と職員の協働を意識した実践報告」も報告される。その後は、このテーマについて、報告者および全参加者間で意見交換する場としたい。

<第８分科会>

学生への留学支援と国際交流に関する試み

参　加　人　数　　35 名
報　　告　　者
　第1報告者　　深澤　清治　（広島大学 大学院教育学研究科 教授）
　第2報告者　　仲谷 ちはる　（東京家政大学 教育・学生支援センター 主任）
　第3報告者　　新井　康友　（京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文学科長・教授）
コーディネーター
　　Robert Kritzer（京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文学科 教授）
　　服部　昭郎　（京都ノートルダム女子大学 国際教育センター長
　　人間文化学部人間文化学科 教授）

第８分科会では、海外の大学、大学院への日本人留学生数が減っている現状に鑑みて、学生に対する留学支援と国際交流に関して、各大学で行われている試みが報告され、フロアとの間で活発な意見交換が行われた。

報告者は、深澤清治先生（広島大学）、仲谷ちはる先生（東京家政大学　教育・学生支援センター）、新井康友先生（京都ノートルダム女子大学）の３名であった。コーディネーターは、Robert Kritzer 先生、服部昭郎先生（いずれも京都ノートルダム女子大学）であった。本稿では、各大学からの報告内容、及び意見交換を通して明らかになった、留学支援を必要とする諸問題について報告する。

１．各大学における試みの報告

前半は、報告者である３名の先生方から、所属大学における試みについての報告が行われた。以下にその内容を報告する。

（1）深澤清治先生（広島大学）

広島大学教育学部の深澤先生は、「語学留学を超えた海外研修の試み－将来の教育人財育成を目指して－」というテーマで、教員を目指す人を対象としたプログラムについてお話をされた。そして留学は、語学だけでなく、新しいものの見方とそれに対する態度を学ぶ機会であることを強調された。そして、日本人の欧米への留学生数が減少し、東南アジアから欧米への留学生が増えていることを指摘された。日本人は内向きでコミュニケーションに消極的な面があること、英語に自信がないこと，留学費用が高いことがその原因としてあげられるとし、言葉はコミュニケーションのためにあるので、「通じる」ではなく「通じさせる」ことも重要であると論じられた。

具体的には、広島大学で施行されている「海外留学単位互換プログラム」（学部教育）と「体験型海外教育実地研究」（大学院教育）を紹介され、「海外留学単位互換プログラム」について、これからの課題は、English only（常に英語で）という意識を維持させることであるとされた。「体験型海外教育実地研究」については、実習生の授業内容が，①日本紹介型（例:ふろしきの話など）、②日米比較型（例:日米のハンバーグの違いなど）、③日米共同型（漢字を見せて意味を当てさせるなど、一緒に活動をする）の三つに分類され，参加者にとって貴重な体験になっていることが報告された。

（2）仲谷ちはる先生
（東京家政大学　教育・学生支援センター）

東京家政大学の仲谷ちはる先生は、「学生への留学支援と国際交流に関する試み－大学の教育理念の発信を目指した授業事例－」というテーマで報告

された。留学も国際交流も教育の根本（教育理念）に根ざしたものであらねばならいとし、大学の教育理念の発信を目指した留学前教育が行われることの重要性を強調された。

そして、最近の大学における留学支援としての授業事例を紹介され、なかでも授業目標に注目された。そこでは英語運用能力や異文化理解対応能力の向上を目指すものは多いが、大学の教育理念の発信を目指すものは見受けられないことを指摘された。また、勤務校における留学支援としての授業「海外留学概論」で、ゲストスピーカーとして関与した１コマの授業事例についても報告された。そのうえで、留学に関する教育に職員が参加する教職協働の意義と課題について触れられ、留学が大学教育留学として意義のあるものとなるためには、留学が教育理念の「発信要素」として機能していることが必要であると論じられた。また、留学に関する教育においては、教職員の連携、協働体制が大きな意味を持つことも強調された。東京家政大学では、教職員の協働体制を重視して取り組んでいる結果、留学生数の減少は見られないことを報告された。

（3）新井康友先生（京都ノートルダム女子大学）

新井康友先生は、「The Study Abroad Program at Kyoto Notre Dame University : An Overview」というテーマで、京都ノートル女子大学で施行されている国際留学プログラムについて報告された。ポイントは、①プログラムがカリキュラムに沿ってできていること、②歴史的に発展してきたプログラムであること、③学科が目指すものとプログラムの一致を重要なことと考えていることの三点であった。

そして、プログラム発展の歴史を概説され、1961年に開学してから「英語から始まった大学」として、一貫して英語教育に力を入れてきたと説明された。交換留学は、アメリカ合衆国の３校と提携し、「英語を学ぶ」から「英語で学べ」という考え方のもとに実施されていること、最近は留学生数が減少してきており、その理由として経済的な問題が考えられること、英文科独自の予算で対応しているが、今後の大きな課題であることを強調された。

２．フロアとの意見交換を通して

後半では、上記の報告内容を踏まえて、報告者及びフロア間で活発な意見交換が行われた。意見交換の主な柱は、（１）費用、（２）言語トレーニング、（３）留学後ケア、（４）オフィスからの支援、（５）留学できない学生へのケアの５つであった。以下に、それぞれを具体的に紹介する。

（１）費用については、アメリカの物価が高く（以前の３倍）、留学に要する費用が障壁になっている学生が多いということである。支援として、フロアから、「留学在籍料が必要となるが、代わりに大学の学費、留学先の学費を無料にする（生活費は学生負担）」といった取り組みがなされていることが報告された。「提携校の学費を半額、または全額免除するなどして、二重払いにならないようにすること」も必要であることがわかった。

（２）言語トレーニングについては、「英語以外の言語学習に対するカリキュラム上の配慮の必要性」、「学力が低下し、英語の読み書き作文ができないことへの対応」、「場面場面で必要とされる語用論的な意味での言葉の問題に対応できる力が必要」といったことが留学前教育における課題として挙げられた。

（３）留学後ケアについては、語学力を持続させるために「研修センターに宿泊させ、英語での研修を行う」、「アメリカ人教員の英語の授業に入れるようにする」、「誰かの役に立ちたい、という意欲を持って帰って来る学生が多いので、これから留学する学生のサポートする機会を提供する、オープンキャンパスで留学経験について話す」などの取り組みがなされていることがわかった。

（４）オフィスからの支援については、「教職員の連携、協調しながら、それぞれの役割でサポートすること（教員は事前事後の指導、職員は手続き上のこと、教員と学生をつなぐコーディネーター）」、「留学前の説明会で留学経験者に話をしてもらう」、「海外生活に対する危機意識、自主性が低い学生が多いので海外渡航安全説明会を開く」、「海外からの留学生と交流できる場を提供する」といった取り組みがなされていることがわかった。

（5）留学できない学生へのケアについては、（4）と重なるが、「海外からの留学生と交流できる場を提供する」、「英語での宿泊研修に参加し、疑似的な留学経験をさせる」といった取り組みがなされていることがわかった。

以上のように、第８分科会では、「学生への留学支援と国際交流に関する試み」について、具体的な問題点や課題が提示され、それに対する取り組み（試み）についても示唆に富む多くの情報交換、議論がなされ、実りのある有意義な内容となった。

文責　京都ノートルダム女子大学　田中誉樹

語学留学を越えた海外研修の試み
ー将来の教育人材育成を目指してー

広島大学 大学院教育学研究科 教授　　深澤　清治

第17回FDフォーラム（京都産業大学）
第8分科会『学生への留学支援と国際交流に関する試み』

語学留学を越えた海外研修の試み

ー将来の教育人材育成を目指してー

日　　時：2012年3月4日（日）
発表者：深澤 清治（広島大）

1

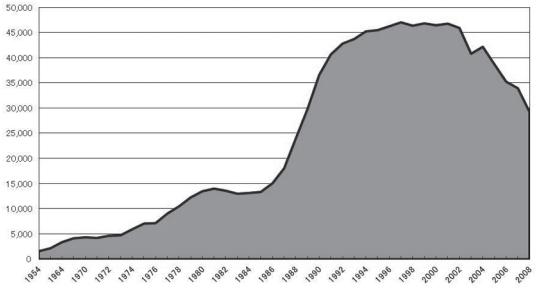
第17回FDフォーラム（京都産業大学）
第8分科会『学生への留学支援と国際交流に関する試み』

1．落ち込む海外留学
なぜ？
・海外生活のリスク
・現状への満足と内向き思考
・英語力の自信のなさ

→英語がネックと言うけれど「日本人は，コミュニケーションができないから英語力がつかない」（ネウストプニー，1982）

2

日本人留学生数の変遷 (1954 – 2009)



3

2．アメリカの大学における日本人留学生の動向

（1）日本人留学生の構成比（2009-10年）
・総数 24,842人（前年比 15.1%減、全米の留学生総数の 3.6%、国別では第 6位）
・1997年までは第1位，2000年度第3位，2008年度第5位
・英語研修プログラム（Intensive English Program）では過去20年間第1位（～2005） 2009年度は第4位

（2）日本人留学生の人気志望専攻分野
上位5 分野 1. ビジネス（20.9%）、2. その他（17.0%）、3. 社会科学（13.2%）、4. 集中英語（11.3%）、5. 芸術（8.8%）

4

アメリカの大学における日本人留学生の動向

（3）近年の日本人留学生の特徴
1）大学学部に留学する学生が，大学院に留学する学生よりも多い
2） 全体は減少傾向にあるが、non-degree（学位を取得しない）で留学する日本人留学生数は、過去3年間（2008-10 年）の推移によれば、増加傾向にある

ー日米教育委員会資料から

5

アメリカの大学における日本人留学生の動向

（4）日本人の志望理由・動機
1） 国際性を身に付け、視野を広めたい。
2） 英語力を向上させたい。
3） アメリカの大学で学ぶ経験をしたい。
4） さまざまな人々との交流を通じてネットワークを築きたい。
5） 留学経験を将来の仕事に役立たせたい。
6） 日本より学ぶ機会が多く、教育内容が多様で魅力があるから。
7） 学位を取得したい。
8） ある特定の専門分野の教育の質・内容が日本より優れているから。
9） 将来、外資系企業、または外国で働きたい。
10） 外国、特にアメリカで暮らすことに憧れていた。

6

留学を通して何が伸びるのか？

1. Language development（言語的伸長）：
   ・話す力とTOEIC/TOEFLスコアの伸び
2. Psychological states（心理状態）：
   ・コミュニケーション意欲（Willingness to communicate）や自信，動機
3. Pragmatic / sociolinguistic（文法外能力）
   ・場面や状況に応じた適切な表現

▶ 7

3．より魅力的な留学研修

（1）海外留学単位互換プログラム

・2年次前期専門授業を留学先の大学で受講（15週間）＋ホームステイ
・英語能力の向上（外部テストなど）
・コミュニケーション上の自信
・積極的な受講態度
・残る課題 ’English only’ への意識維持，高い留学費用

▶ 8

（2）大学院体験型海外教育実地研究

・教員志望の大学院生に特化したプログラム（初等カリキュラム中心）
・アメリカ合衆国ノースカロライナ州の小・中学校で教育実習
・実習内容の変化：
  ①日本紹介型（例：「日本のふろしきについて」）
  ②日米比較型（例：「日本とアメリカのハンバーガーショップメニューの比較」）
  ③日米共同型（例：現地の子どもたちと「オリジナルカルタを作ろう」）

▶ 9

留学を通して何が伸びるのか？

- **Study 1** メールを用いた微視発達的研究（Microgenetic analysis）
  ■目的
    1）一定期間の言語的伸長を分析する
    2）特定の言語特徴について分析する（強調の副詞
  ■被調査者　日本人大学2年生(英語専攻）Yuka
  ■調査期間　2008年4月から15週間
  ■データ収集方法　毎週1回送信されたEメール
  ■結果
    1）メールの平均語数の伸び（100語から150語前後へ）
    2）メール英語の口語化（‘so’の使い方、など）

▶ 10

留学を通して何が伸びるのか？(Study 2)

■留学中の問題点についてのアンケート調査

■結論

1）ホームステイ場面が最も困難な場面
2）話し相手との力関係（教師vs学生）よりも社会的・心理的距離（親密さ）などの気遣い
3）日本事情に関する知識不足

▶ 11

4．これから留学を考えるみなさんへ

・自文化や他文化への同化から多様性を認める統合，bilingual/biculturalの時代
・留学は自分を発見する最高の機会，未来の自分への投資
・好奇心（curiosity），柔軟性（flexibility），そして開かれた心（open mind）を持って
・「みんなちがってみんないい」金子みすず，『わたしと小鳥とすずと』

▶ 12

学生への留学支援と国際交流に関する試み
ー大学の教育理念の発信を目指した授業事例ー

東京家政大学 教育・学生支援センター 主任　仲谷 ちはる

はじめに

1. 立脚点

学生の留学も国際交流も、大学の教育理念に基づいて考えなければならない

2. テーマ設定の理由

(1) 大学の教育理念の発信を目指した留学前授業は行われているのか。
(2) 大学教育としての留学の意義と課題を見出したい。

3. 留学の理念と効果 --- 知見／言語力、受信／発信という視点

(1) 知見：生活様式や考え方
　・受信：海外滞在という実体験を通して「気づきを得る」
　・発信：滞在先の相手に「**気づきを与える**」個人・大学生・日本人（として）
(2) 言語力：言語学習の進展（滞在先が英語圏の場合）
　・受信：英語の 4 技能を学ぶ意味を直接的に知る・感じる「学習の動機づけ強化」
　・発信：これまでに培った英語の技能を試す「武者修行・力試し」

Ⅰ．いくつかの大学の授業事例

1. いくつかの大学の授業事例

(1) 対象：英文学科、コミュニケーション情報学科、国際学部国際学科、全学共通教育科目、国際日本学部国際研究科目
(2) 科目名：Pre-Study Abroad Seminar、異文化コミュニケーション論実習、留学支援特別講座Ⅰ～Ⅳ、海外留学と国際教育交流
(3) 開講年次 / 期間 / 単位：1(2)/ 半期 /2 単位、2/ 通年 /4 単位、1 ～ 4/ 半期 / 通年
(4) 目標：英語運用能力、異文化対応（適応）能力、情報発信（プレゼン）能力、自らの海外留学を考える

2. 考察

(1) 留学前授業では、英語運用能力や異文化対応能力等の向上を目指したものが多く見受けられる。
(2) 留学前授業で、大学の教育理念の発信を目指したものは見受けられない。

Ⅱ. 勤務校の授業事例

参考資料

1. 授業全体の概要・発表者が関与した授業・アンケート調査

(1) 授業全体の概要 ［資料 1］

①対象：英語コミュニケーション学科
②履修者数：65 名
③科目名： 海外留学概論Ⅱ
④開講年次・期間・単位： 2 年次・半期・2 単位
⑤授業目標：海外で survive 出来る力をつけること、自分や日本に関して英語で伝える力を養うこと
⑥授業計画：15 回（集中授業）

(2) 発表者が関与した授業 ［資料 2, 3, 4］

①概要：アンケート調査、授業の目的、グループ討論、グループ発表、まとめ
②意義：学生、教員、職員の 3 者の視点から
③課題：3 点

(3) アンケート調査 ［資料 5］

①教育理念の認知度（授業前後の調査から）
②学生の意識変化（授業直後の感想文から）
③留学先での実践（帰国後の追跡調査から）

2. 考察

(1) 職員が授業に関与することは、大学教育としての留学（支援業務）の意義と課題を見出す可能性がある。企業理念でなく大学理念に基づく留学支援の重要性に気付く。
(2) 留学と大学の教育理念との関連付けは、学生が留学先で「大学生としての自分」を発信する準備となる。留学先では言語力だけでなく発信する内容も大切である。

おわりに

1. 本発表のまとめ

(1) 授業事例：留学と大学の教育理念、知識・技術・視点のバランス
(2) 勤務校の授業事例：大学教育に基づく留学支援、学生の発信要素としての教育理念

2. 今後の課題

(1) 他大学における留学前授業のさらなる調査　－　教育理念・授業・留学の関係
(2) 財政的に留学できない学生への支援　－　国内留学制度の充実、留学奨学金の整備
(3) 組織的な教職協働による継続性の確保　－　組織・体系的な教職協働の必要性

［参考資料］勤務校の留学プログラム一覧

東京家政大学が企画する海外留学・海外研修・国内セミナー

区分				研修名（国）	期間	時期	人数
海外留学	認定留学		1	認定海外留学プログラム（大学院生対象）（本学提携校または大学院承認の大学等）	6ヶ月以上	お問い合わせ下さい	
	交換留学		2	ニューキャッスル大学交換留学（オーストラリア）	5ヶ月間	2月～6月	2人
海外研修	語学研修	短期	3	チチェスター大学語学研修（イギリス）　＊隔年実施	3週間	8月	20人
			4	ワイカト大学語学研修（ニュージーランド）	4週間	2月～3月	20人
			5	マニトバ大学短期語学研修（カナダ）　＊隔年実施	6週間	8月～9月	20人
		中期	6	ブラッドフォードカレッジ春期研修（イギリス）	2ヶ月間	4月～6月	5人
			7	サウスイースト・ミズーリ州立大学研修(アメリカ)	2ヶ月間	6月～8月	5人
		長期	8	マニトバ大学春期研修（カナダ）	6ヶ月間	2月～8月	5人
			9	マニトバ大学秋期研修（カナダ）	6ヶ月間	8月～2月	8人
			10	ブラッドフォードカレッジ秋期研修（イギリス）	7ヶ月間	9月～3月	5人
	専門研修		11	韓国文化・美術研修（韓国）	1週間	9月	20人
			12	クィーンズランド大学環境保全＆英語研修（オーストラリア）	2週間	8月～9月	15人
			13	クィーンズランド大学幼児教育＆英語研修（オーストラリア）	2週間	3月	24人
			14	シアトルパシフィック大学栄養＆英語研修（アメリカ）	2週間	2月	20人
			15	ヨークカレッジ服飾美術＆英語研修（イギリス）	4週間	8月	20人
国内セミナー	語学研修		16	箱根グリーンセミナー（集中英語＆異文化研修）（日本）	4日間	8月	20人

国際交流センター（以下、センター）は、東京家政大学における国際化を推進するため 1993 年（平成 5 年）4 月に板橋校舎および狭山校舎に設立されました。2009 年（平成 21 年）4 月より、大学のワンキャンパス化に伴い板橋校舎に統合され現在に至ります。これまで百周年記念館 4 階にあったセンターの窓口は 2009 年 8 月に 16 号館 1 階へ移り、3 名の職員と 7 名の教員が協働して学生の教育支援を行っています。

センターでは、主に以下の 3 つのことを行っています。

1．海外留学・海外研修・国内セミナーの企画・運営
2．国際交流行事の企画・運営
3．機関紙「センターニュース」の発行

1．海外留学・海外研修・国内セミナー

「異文化理解は、非常識なものを常識と考えられる心の広さがあるところから始まります」（海外留学・海外研修ガイドより）

現在、世界 6 カ国 10 大学と連携し 16 の大学企画プログラムを運営しています。年間約 130 人、これまでに約 2000 人の学生さんが留学プログラムに参加し異文化を体験しています。センターでは、大学の援助を得て、たくさんのプログラムを実施し、学生の皆さん方の夢をかなえるお手伝いをしたいと考えています。

まずは 4 月・10 月の留学説明会に来て下さい。そこで情報収集や研修の概要を聞くことが出来ます。国内セミナーは初心者向けの 4 日間のプログラムです。海外が不安な方、日程的にも短期間を希望の方、特にお薦めです。短期語学研修や専門研修は学年・学科問わず、誰でも応募出来ます。2 ヶ月以上の語学研修は、TOEFL ITP という英語能力試験を受験し、求められる基礎英語力のある方の中から選抜されます。また、6 ヶ月の海外研修は本学の授業料（半期）が免除される制度もあります。交換留学は、正規生として科目履修し単位および評価を得る十分な英語力が必要となります。2 ヶ月以上のプログラムは 1 年前から準備をすると良いでしょう。認定留学は、大学院生対象のプログラムです。参加にあたっての諸条件等は個々のケースにより異なるため、大学院事務室へお問い合わせ下さい。

2．国際交流行事

5月　：日帰りフィールド・トリップ（野外バーベキューなど）
6月　：国際料理教室（留学生の母国料理を参加者で調理・試食）
9月　：留学生親睦バス旅行（染色やそば打ちなどの体験学習付き）
12月：クリスマスパーティ（ケーキを囲んでゲームなどで交流）

3．「センターニュース」

毎年 4 月に 8,000 部を発行。設置場所は、16 号館 1 階と百周年記念館 1 階です。体験記や新情報満載、ぜひ読んで下さい。

『TOKYO KASEI PRESS』第 54 号（2010.7）より

［資料 1］勤務校の授業事例（授業全体の概要）

東京家政大学「海外留学概論Ⅱ」（シラバスを加工して作成）

<table>
<tr><td colspan="2">科目名</td><td>海外留学概論Ⅱ</td><td>開設年次</td><td>2 年生</td></tr>
<tr><td colspan="2">担当者名</td><td>家政太郎</td><td>単　　位</td><td>2 単位</td></tr>
<tr><td>授業概要</td><td colspan="4">時間割の都合上、今年度は集中講座となります。2 月の上旬を予定しています。1 日 3 コマ（90 分× 3）で 5 日間行います。対象は、在学中に海外研修（留学）を希望している学生及び、海外研修（留学）経験済みの学生を主な対象としますが、その他の学生も受講可能です。我が国の留学事情の紹介から始まり、留学時に注意すべき諸外国の国情を紹介し、ホームステイ先等で必ず必要となる英語表現を勉強します。海外研修（留学）経験のあるゲスト・スピーカーを招き、研修（留学）時に必要な問題解決力について話をしていただきます。</td></tr>
<tr><td>到達目標</td><td colspan="4">海外研修（留学）を予定している学生及び、海外研修（留学）経験済みの学生を主な対象としますので、自己の危機管理を含め海外で survive 出来る力をつけることを第一の目標とします。
海外へ行くと、自分に関することや、日本に関することが必ず問われます。よって、自分や日本に関し英語で伝える力を養うことを第二の目標とします。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">授業計画</td><td>第 1 回～ 3 回</td><td colspan="3">① Induction、②我が国の海外留学事情、③ゲスト・スピーカー（平成 23 年 2 月 2 日）</td></tr>
<tr><td>第 4 回～ 6 回</td><td colspan="3">④～⑥海外事情　ニュージーランド (1) ～ (3)</td></tr>
<tr><td>第 7 回～ 9 回</td><td colspan="3">⑦～⑨海外事情　オーストラリア (1) ～ (3)</td></tr>
<tr><td>第 10 回～ 14 回</td><td colspan="3">⑩～⑭英語表現研究　入国審査／自分や自分の家族等の紹介／ホームステイ先／日本文化紹介／買い物</td></tr>
<tr><td>第 15 回</td><td colspan="3">⑮試験</td></tr>
<tr><td colspan="5">［評価］出席と試験で評価します。［テキスト］ハンドアウトを用意します。
［準備学習］海外で何を学びたいか、しっかりとした考えを前もってまとめておいて下さい。</td></tr>
</table>

［資料 2］発表者が関与した授業（概要・意義・課題）

1．概　要

(1) 教育理念の認知度を図るアンケート調査を授業の前後に行う。

(2) 国際交流センター職員（発表者）がゲスト・スピーカーとして授業に参加する。まず、大学の 2 つの教育理念と留学プログラムとの関連性について説明を行う。次に、個人およびグループにより留学時に必要な問題解決力や教育理念実践の方策を考えさせ、最後にグループ発表を行う。

2．意　義

(1) 学生：留学先で大学生として大学の教育理念を発信する準備ができた。

(2) 教員：留学を運営面から語る事ができた。学生に異なる視点を与え、留学について多岐に渡る情報を教授することで意識づけを深めることができた。（教員からのコメント）

(3) 職員：大学教育としての留学（支援）のあり方を見直せた。留学前授業（教員の役割）と留学オリエンテーション（職員の役割）を整理し、留学支援業務全体を見直すことが出来た。授業における教員と学生との信頼関係の重要性を再認識した。普段接しない学生との接点ができた。

3．課　題

(1) 留学前授業と留学オリエンテーションで扱う内容を整理し、留学支援の更なる充実を図る。

(2) 教職協働の基盤を強化し、更に学生を含めた三者協働による留学支援への発展を目標とする。

(3) 留学後のフォローアップでも教職協働の取組を積極的に行うことが必要である。

［資料 3］発表者が関与した授業（90 分の授業概要）

「海外留学概論Ⅱ」授業の概要

平成 23 年 2 月 2 日（水）

1．はじめに（5 分）

前回のおさらい

・　教育理念についてのアンケート調査

・　前回のおさらい

2．本授業の目的（15 分）

大学の 2 つの教育理念「建学の精神」「生活信条」と海外留学との関係を考える

3．グループ討論（30 分）［教育理念をどのように海外留学で実践できるのか］----------＞［資料 4］

・　６人× 10 グループを作る（留学経験者と未経験者の混在グループ）

・　進行役、発表者、書記を決める

・　大学の 2 つの教育理念は何か？誰が言ったことばか？英語では何というか？
留学においてどのように実践できるか？（資料 4 のワークシートへの記入）

4．グループ発表（30 分）

・　グループごとにワークシートにまとめられたことを発表する

5．まとめ（5 分）

・　大学の教育理念とカリキュラムの関係

・　本授業のおさらい、質疑応答など

・　教育理念についてのアンケート調査

［資料4］グループ討論（ワークシート）

東京家政大学の教育理念を留学でどのように実践できるか

個人ワーク				グループワーク
教育理念	提唱者	キーワード		キーワードを、留学を通して実践するための具体例
建学の精神	主唱者： 渡辺辰五郎 （校祖）	a 自主自律 Independence and Autonomy		① 【1】英語で話す努力をする、留学前に単語など日常会話に必要な勉強をする 【2】自分で調べる、考える、自分で決める→自分で行動 【3】事前の下調べ 【4】自分で起きる 【5】道に迷っとき人にきく、身の回りの整理整頓 【6】自己管理をしっかりする（朝自分で起きる、お金の管理など）
生活信条	主唱者： 青木誠四郎 （初期の学長）	1	b 愛情 Affection	② 【1】相手の文化を理解した上で相手に接する（郷に入っては郷に従え） 【2】他人の立場をしっかり考えてその人の立場に立ったつもりで行動する 【3】他人への思いやり、席をゆずる 【4】席をゆずる 【5】シャワー後の髪の毛を取る（ホストファミリーのために）、自分の部屋を綺麗にする 【6】相手の立場になって行動する
		2	c 勤勉 Diligence	③ 【1】英語力を上達させるだけでなくバイトなどの社会経験を通して文化や自国との違いを吸収していく 【2】一生懸命勉強する 【3】めりはりをつける 【4】毎日予習・復習をすること 【5】毎日英字新聞を読む、予習復習 【6】毎日学校に行く
		3	d 聡明 Intelligence	④ 【1】何のために留学しているかを考え、それを意識して行動する 【2】ちゃんとした決断ができること 【4】自分を信じる 備考：重複は学生の発言をそのまま記したためです。

1．①～④に、留学を通してキーワードをどう実践できるのか具体例を書いて下さい。

[資料 5] 学生の意識変化（授業直後の感想文から）

	ID	感想・意見
	1	家政の理念を全く知らなかったけど、生きていく上であたりまえなことだと知った
	2	もし自分が留学へ行ったら積極的に話しかけて、少しでもプラスになるようにしたいなと思いました。とても勉強になりました。
	3	今まで建学の精神や生活信条について考えたことがなかったので、家政大の生徒として覚えておきたいと思った。何気に16号館の像に書いてあるのに、読まなかったので、今度そこを通ったら読みたいと思った。
	4	留学するということは、文化の違いに直面するので、語学だけではなくたくさんのことを学ばねばならないと思いました。
	5	大学2年がおわろうとしているが、学校の教育理念やカリキュラムにはあまり意識して見ていなかったので、質問されてもよくわからない状況でした。しかし授業を通して海外留学を結びつけて学ぶことができた。
	6	未回答
	7	今まで知らなかった教育理念について知れました。自主自律等をみんなで考えたことによってこれから私も少しずつ実践して行こうと思いました。
	8	今まで知らなかった建学の精神や生活信条について知ることが在学中にできてよかったです。これから少しでも意識して生活できればいいなと思いました。
	9	自分の大学の教育理念や生活信条を全く知らなかったので、今回知ることができて良かった。また、そのような理念をもとに、これから意味のある生活をしていきたい。
◎	10	東京家政大学の教育理念「建学の精神」や「生活信条」など全く知りませんでした。ですが、今日この授業で改めて知ることもでき、これから留学に行くのでそのための復習にもなりました。短い時間でしたがありがとうございました。
◎	11	教育理念と留学をつなげて考えることで、見えてくる目標や留学先での意識を高く持つことの大切さを再認識できました。とても為になり、良い授業でした。
	12	未回答
	13	未回答
	14	大学の建学の精神については、入試の時に調べていたのである程度は知っていましたが、主唱者や生活信条については初めて学ぶことができたので、大学に通う基礎のことも忘れてたのでとても勉強になりました。残り2年の大学生活を、今の自分を見直し、さらに悔いの残らぬようにしていきたいです。
	15	教育理念についてよく分からない事はまだあるが、以前よりだいぶ学校についての知識はついた。また自分の言葉にしておきかえてみることは意外にむずかしかった。
	16	未回答
	17	未回答
	18	大学の教育理念を深く知ることができて良かったです
	19	2年になってやっと家政大の教育理念を知り、理解できた。英語関係なく、他人とコミュニケーションをとるには相手について知らなければならないので留学の場合、事前学習が必要だと考えた。
	20	自主自律は分かっているようでわかっていなかった。今日改めて確認したことで、自主自律できるようにがんばろうと思った。
●	21	教育理念については全く知らなかったので良い機会になったと思います。しかし海外留学概論の授業として考えると、理念の内容中心で、私はあまり留学のことと結びつけて考えることができませんでした。グループワークとして少人数で自分とは違う意見を聞けたのも良い経験かなと思います。
●	22	留学するとなると、いろいろ心がまえや考えることができ大変だけど、一度でいいからしたいと思いました。
	23	未回答
	24	今まで学校の”建学の精神”や”生活信条”のことは全く知らなかったので、この授業を機に知ることができて良かったとおもいます
○	25	普段まったく話をしたことがない子とも話すことができて嬉しかった。コミュニケーションが取れることは大事なことだと思った。
	26	建学の理念や生活信条を自分なりではあるけれど、理解でき良かったと思います。これら2つを生かし、これからの大学の勉強や留学に役立てようと思いました。
	27	今までは大学の教育理念など知らなかったけれど、この大学で学ぶことができて良かったです。

＊ＩＤは27名の学生を意味します。

The Study Abroad Program at Kyoto Notre Dame University : A Report

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文学科長・教授　新井　康友

I will report on the study abroad program at Kyoto Notre Dame University (KNDU, henceforth) and how it fits into the aim of English Language and Literature Department. I will also report on the number of students who have gone on two of the programs at the end. I will limit the report on the study of English abroad, which was the first and foremost purpose for KNDU's study abroad programs.

English Language and Literature Curriculum

The English Language and Literature Department bases its curriculum on the idea that language study is ``from study of English to study by use of English,'' which was an idea implicit in its curriculum from the very beginning. We celebrated our 50th anniversary in December 2011 and when we look back to the beginning, the idea was to first have the students study English, which was the language of our founders, and from there, to extend their knowledge of English by studying something using English, such as literature, linguistics, or communication.

A Very Short History of Study Abroad Program

The study abroad program at KNDU began in 1969. The first program was to have students experience life in another culture under another language. Students were taken to St. Louis in the U.S.A., where they spent a month learning English and living in the community.

Now, the study abroad program has been extended to three types; Kenshuu, Semester Study Abroad, and Study at our Sister Colleges.

Kenshuu is a set of programs which is an extension of the program we had from the beginning. We send students, during the summer and spring recesses, to universities in North America,

Scotland, and Australia for three to four weeks. They study English in their respective language programs. They also live in a ``home-stay'' situation during their stay and go to their classes from their `homes.'

Semester Study Abroad is a program in which a student goes abroad to study English for one semester (extendable to two semesters) also to colleges and universities in North America, Britain, and Australia.

Study at our Sister Colleges is designed to have a student go to our sister colleges in the United States (Mount Mary College in Wisconsin, College of Notre Dame of Maryland, and Regis College in Massachusetts) and study with the students in those respective colleges.

Curriculum and Study Abroad

The study abroad program at KNDU is based on the same idea of having a student begin by studying English and extend her knowledge of English by having her study something using English. Kenshuu initiates a student to English and living in foreign communities. Semester Study Abroad allows a student to go abroad to study English and have a taste of learning something using English. Study at our sister colleges allows a student to make use of their knowledge of English to learn something other than English with students of U.S. and other countries.

In this way, our study abroad program continues the initial aim of learning that our founders had began.

The Recent Reduction of Students Going Abroad

Now the question is why the number of students going abroad has gone down over the years. Let us first take study at our sister colleges. We must first mention that to go under this program, a student must first take TOEFL and receive a 500 to 600 on PBT (or 61 to 80 on iBT) in order to qualify to go. This is the usual demand made by colleges and universities in the U.S.A. for foreign students. The requirement

was met at the beginning of this program in 1991. However, as you see (in Appendix I) from the numbers of students going to our sister colleges under this program every year, the number has gone down drastically, with the peak at 1998, until the numbers have dropped to zero most recently. This is mainly due to the drop in academic performance of our students, but also due to the rise in tuition in the U.S.A. and the economic down fall in the 1990's.

The mid-way program, the Semester Study Abroad Program, has been constant with the numbers going up and down even now. The program is still young and perhaps more congenial to our students since the requirement is not as improbable for them as going to sister colleges. We may have as many as 12 going in one year and then the following year we may have four. Actually, since the students seem to want to go together with their friends, we limited the number of students to two students per institution in one semester, since we do not want too many going together. Thus, the upper limit of the number of students who can go is limited by the number of institutions open to this program, which is five (East Anglia University in England, Monash University in Australia, Regina University in Canada, University of California, Davis in the U.S.A., and College of Notre Dame of Maryland) at the moment.

The number has dropped drastically under Kenshuu, until now we have as few as 18 students going in the year 2011. The fee for this program has not changed much since the beginning and unlike the program to our sister colleges, there is no requirement for TOEFL. We see, therefore, that for some reason the number of students going abroad under this program has dropped drastically since the year 2004, not because of cost or of academic performance, as much as of their desire or will to go abroad. The number going abroad has dropped in general among Japanese students, as we see from the numbers provided by the KagakuMonbusho (on page 4), also beginning in 2004. We should note, though, that since around 2006, the number of credits students receive from this program has been reduced from 6 credits to 2. This may have had quite an effect.

Answers to Questions Asked at the Meeting

In the following, I present the Q and A session we had following our reports.

The number of institutions we have contract with: There was a question on the number of institutions we have contractual ties with and our Kacho, who happened to be present, answered it for me. We have more than 15 contractual ties with universities and colleges in North America, Britain, and Australia.

Some problems the students face because of cultural differences: Another participant asked what sort of problems the students face in their overseas experience. I mentioned in my report that when I myself first went to the U.S.A. in 1958, the gap between the two countries was so big that I had problems adjusting to life there and also when I came back to Japan in 1967. Nowadays, Japan is just as advanced, if not more advanced, than some of the places the students go to. However, they still face some problems from differences in life style. The three biggest problems they face involve clothes, food, and water.

Fashion of young people in Japan today is so unique that they face problems in other countries. We recommend or even plead with them to wear clothes more atuned to clothes students wear in the countries they visit.

In North American countries, the food people eat for breakfast and they take for lunch is very simple; a bowl of cereal for breakfast and a simple sandwich for lunch. Our students complain that it is not an appropriate meal.

Japan is quite rich in water supply. Not all countries are blessed with this abundance. The homes where they stay complain that our students use too much water for bathing and shampooing. This is a very big problem for our students, who take bath and shampoo their hair everyday.

Overall, the students do not face the kind of problems I faced when

I went to the U.S.A. in 1957 nor when I came back in 1967. However, because Japan has advanced quite a bit since then, our students face different kinds of problems, the sort I mentioned above. We expect further problems of this sort as Japan advances further in its unique way.

References

ノートルダム女子大学 (1991),『ノートルダム女子大学３０周年史』.

京都ノートルダム女子大学 (2001),『京都ノートルダム女子大学創立４０周年記念誌』.

京都ノートルダム女子大学 (2011),『京都ノートルダム女子大学創立５０周年記念誌』.

Center for International Education at Kyoto Notre Dame University. <http://www. notredame.ac.jp/int/index.htm>.

『日本人の海外留学状況』.
<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/01/__icsFiles/afieldfile/2012/02/02/1315686_01.pdf>

Appendix I:

米国姉妹大学派遣留学生の推移

年度	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	合計
マウントメリー		0	1	0	1	1	1	4	1	2	0	11
メリーランド	9	1	2	2	0	4	2	3	5	1	1	30
レジス		1	3	3	5	3	9	9	6	6	6	48
合計	9	2	6	5	6	8	12	16	12	9	7	89

(adapted from 京都ノートルダム女子大学 (2001))

Appendix II:

特定目的海外研修実績表（１９９５～２０１１）

年度	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11
アメリカ	29	47	15		29		25		22		21		22			14	
英国	29	22	20	21		26		23		16		16		11			14
カナダ			30	32	32	33	32	31	25	25	18		25	22	18	20	
オーストラリア	24		12		23		20		24		20	24	13		17		4
合計	58	93	77	53	84	59	77	54	71	41	59	40	60	33	35	34	18

(adapted from 京都ノートルダム女子大学 (2011))

Appendix III:

Conditions on Going Abroad under the Three Programs

Kenshuu Program: Anyone with TOEIC score above 300 can go.

Semester Study Abroad Program: Anyone with TOEIC score above 400 can go.

Study at Sister Colleges: Must have score above 550 (PBT) or 61 (iBT) TOEFL (which is about 700 or above on TOEIC) and a high GPA.

●1969年7月12日、第1回アメリカ研修旅行

国際交流

1969年、1ドル360円の時代に、すでにアメリカへの1ヵ月の研修旅行が行われ、38名もの学生が参加していた。ルーツそれ自体が異文化との出会いだった本学の国際交流活動は、その後も極めて個性的に、ノートルダムらしく進化していった。

■アメリカをぐるりと見聞できる研修旅行

1969年に行われた第１回アメリカ研修旅行は、夏休みにセントルイスのマザーハウスにあったノートルダム・カレッジで学び、ホームステイをしながらアメリカ文化を体験的に学ぶという１カ月程度の行程だった。当時、本学にはアメリカ・セントルイス管区のSSNDのシスターたちが多数派遣されており、日本のシスターたちも研修でアメリカに赴いていた。当時の日本で、アメリカへの１カ月の研修を行う大学は珍しく、学生にとっても人気のプログラムとなった。

最初の３年間はセントルイスで１カ月を過ごす内容だったが、その後、アメリカの７管区を巡るプログラムへと拡大した。このプログラムは10年ほど続いたが、観光色が強くなりすぎたとして中止された。

国際感覚を磨くなら留学の方が確実に成果が上がると、1979年、学則を改正して正式な留学制度ができる。1989年から1990年にかけては、同じノートルダム教育修道女会のアメリカのマウントメリー大学、メリーランド・ノートルダム大学と姉妹大学協定を結び、翌年には２人の学生が１年間留学した。1980年代後半、留学ブームが到来し、本学の学生にも留学希望者が増加した。留学先を自分で選び休学する学生や、せっかく留学してもESLや語学学校だけで帰国する学生もいた。そこで、メリーランド・ノートルダム大学（1989年）、マウントメリー大学（1990年）、レジス大学（1990年）の３つの姉妹校と交換留学協定を結び、留学先で取得した単位が30単位まで認められ、１年間留学しても４年間で卒業できる留学制度を整えた。制度が整ってから留学をする学生の数は年々増え、ピークの1998年には３大学合わせて年間16名が１年間の留学を体験した。

●1996年 姉妹大学メリーランドノートルダム大学留学

●1998年 英語海外研修Ⅳ（オーストラリア）
オーストラリア・ノートルダム大学（パース）

●韓国カトリック大学
交換留学

●英語海外研修Ⅱ（英国・スコットランド）
エジンバラ大学

●英語海外研修Ⅳ（オーストラリア）
モナッシュ大学（メルボルン）

■ユニークな特定目的海外研修プログラム

1980年代後半から90年代にかけて各大学では国際交流プログラムの充実を図る動きが活発化し、本学後援会（現保護者会）から「短期で誰にでも行きやすい海外研修を作ってほしい」という要望が寄せられるようになった。1994年、当時の教務部内に国際交流事務室を開設した。元保健室だった小部屋からのスタートで1998年までは職員1名体制だったが、1995年には100名近くの学生を短期海外研修に送り出すなど、国際交流事業は大きく動き出した。

本学の短期海外研修プログラムの特色は、研修を導入した初期の頃から単位を認定していたこと、そして語学研修にとどまらないバラエティに富んだ特定目的海外研修として実施したことである。語学研修についてはアメリカ、イギリスから始めてカナダ、オーストラリアと英語圏を中心に協定校を増やした。また、最初は英語英文学科が中心だった希望者が生活文化学科へと広がったことで、生活文化学科の教員が企画する西洋美術史、服飾文化、食文化といった海外研修を開設した。こうして特定目的海外研修は学生の人気となり、ピークの1998年には120名ほどを送り出した。夏休み中に何本かの研修が集中するため、引率者の手配や調整に難航するほどだった。その後、社会福祉海外研修、韓国語海外研修、海外インターンシップ研修なども実施した。各研修は隔年で実施されるものもあり、毎年違う研修が計10カ国以上16大学（機関）で開講されるシステムとなっている。

■優秀な留学生受け入れで学内によい影響

一方、留学は、TOEFL試験のコンピュータ化、2001年のアメリカ同時多発テロの影響で長期留学の希望者が減少した。また、現地学生に混じって学ぶ1年間の留学が「荷が重過ぎる」と敬遠される傾向も出てきた。そこで、2005年からセメスター単位（約6カ月）で留学し、最長1年まで延長できるセメスター認定留学制度を設けた。協定大学が実施する英語集中授業で語学力を高め、基準に達すると専門科目を学ぶことができるというシステムであり、留学前後でTOEICスコアを360点も伸ばす学生も現れるなど教育効果の点でも高い評価を得ている。

2000年からの10年は、留学生受入れも進んだ。学科改組で正規課程に初めて外国人留学生を受け入れ、その後、韓国、台湾を中心に外国人留学生の募集活動を行って出願者が大幅に増加。また2001年からは外国人留学生入試で優秀な人材を選抜した結果、政府の国費外国人留学生や、京都府名誉友好大使に選ばれるような優秀な留学生が入学するとともに、タイやベトナムの協定大学からも交換留学生を受け入れ、日本人学生がその熱心さに刺激を受けるなど学内によい影響を与えている。2010年からはそれまで人間文化学部に限られていた外国人留学生の正規課程受入れが、全学部へと拡大されている。

京都ノートルダム女子大学『京都ノートルダム女子大学 創立50周年記念誌』
京都ノートルダム女子大学 創立50周年記念誌編纂小委員会　2011年12月10日